

3) コナジラミ類（ナスにおける発生調査基準の検討）

1. 調査背景と目的

新たに発生し、調査実施基準が未策定の害虫について、発生動向を的確に把握する調査やその調査結果に基づく発生予察手法をとりまとめ、新たな調査基準を策定するための検討を行う。本調査では、ナスに発生するコナジラミ類を対象に検討を行う。

2. 調査方法

1) 巡回による調査

（調査地点）

県内9地点の露地ナスほ場。

（調査方法及び調査項目）

ほ場の端の畝と中央部の2か所について、1か所25株の合計50株で、任意の中位葉、下位葉それぞれ1葉について成幼虫の寄生虫数を調査する。

（調査時期及び調査間隔）

調査は6～9月に各月1回行う。

3. 調査結果

1) 巡回による調査

コナジラミ類の発生は調査を開始した6月から認められた。また、発生ほ場率は7月以降に急速に高まり、調査が終了した9月まで、高く推移したものの、その発生程度は何れのほ場においても少であった。個別のほ場の発生推移では、7月に急増した那珂川町の1ほ場を除き、概ね8～9月に増加する傾向が認められた。発生種として、オンシツコナジラミ、タバココナジラミの両種とも認められ、混発ほ場もみられた。なお、1ほ場あたりの調査時間は10～15分程度であった。

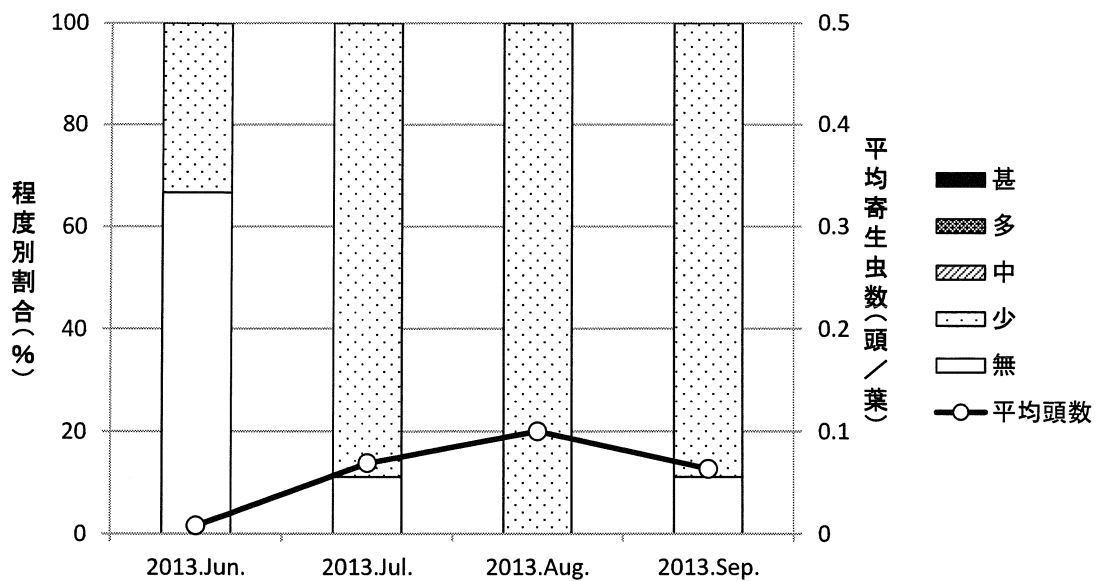


図1 露地ナスほ場におけるコナジラミ類平均寄生虫数と発生程度別割合

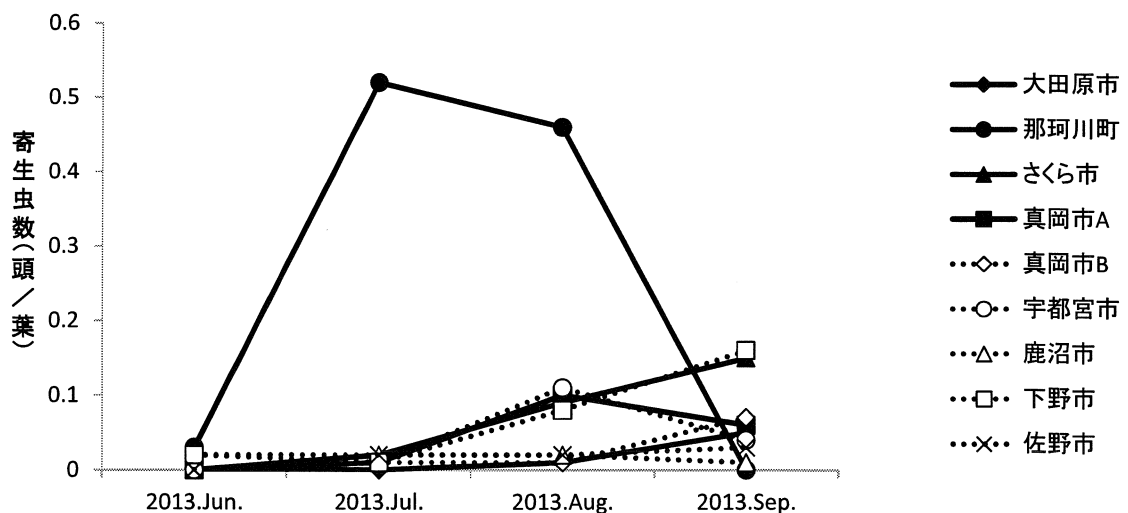


図2 露地ナスほ場毎のコナジラミ類寄生虫数

4. 考察

調査を行ったほ場の大半で8月以降に発生の増加が見られており、本調査によって県内の露地ナスほ場におけるコナジラミ類の大まかな発生推移を把握できると考えられた。なお、一部ほ場では9月に発生量の減少がみられるが、防除によるものと考えられた。

また、栃木県では従来から1ほ場、50株について葉の見取り調査によって、うどんこ病、すすかび病、アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類、ハスモンヨトウ幼虫について調査をおこなっている。コナジラミ類の調査基準案は、これらの調査に組み込むことが可能であった。1ほ場あたりの調査時間は、ナスのタバコガ類調査を含めて10～15分程度であり、複数の作物ほ場を巡回するにあたって適当と考えられた。ただし、今年度は調査期間を通じてコナジラミ類の発

生程度は無か少であり、葉あたり頭数は最大 0.5 頭であった。甚発生基準値が葉あたり 200 頭であることから、調査時間を 1 頭あたり 1 秒と換算しても、 $[1 \text{ 秒} \times 200(\text{頭/葉}) \times 50(\text{株}) \times 2(\text{葉}) = 2000 \text{ 秒}]$ となり、多発生時には 1 ほ場あたりにかかる調査時間、労力が膨大となるおそれがある。

また、本県では露地栽培ほ場で調査を行っているが、数ほ場では土着天敵の発生も認められた。降雨や天敵による捕食・寄生の影響を受け、施設栽培と比較して多発状態となりにくい可能性が考えられる。

5. 今後の課題

コナジラミ類の発生量が少ない場合、調査時間は適切と考えられたが、高密度時には 1 ほ場あたりの調査時間が極端に長くなることが想定され、調査労力の軽減法について検討する必要があると考えられる。

6. 要約

コナジラミ類の発生予察調査手法の実証のため、栃木県内の露地ナスほ場 9 地点について、調査を行った。その結果、調査は既存の発生予察調査内で行うことが可能であり、発生の推移を確認できる現実的なものであると考えられた。ただし、本調査中では発生程度は無か少であったが、多発生時には調査労力が極端に増大するおそれがあり、調査労力軽減について検討が必要と考えられる。

7. 成果の公表及び特許

平成 25 年植物防疫年報（予定）

8. 引用文献

なし